

# 概要・環境学習原論 The Principles of Learning Environment: A Fantastic Abstract

Mikio Kimata

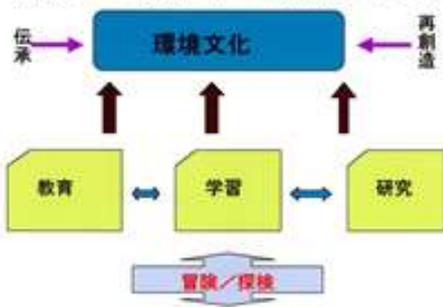
## 目次

### 第1章 生きる楽しみ 序論

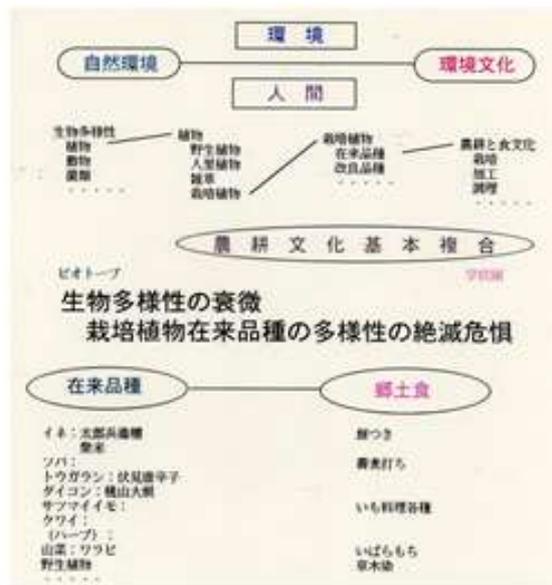
#### 冒険／探検は人生の道草 目的らしいものの分類

- ・ 経済 金儲けの種探し
- ・ 軍事 戦争の手伝い
- ・ 学術 ★ 調査、研究材料を探す
- ・ 宗教 布教、修行、経典を探す
- ・ スポーツ 心身の楽しみ
- ・ 観光 ★ 物見遊山
- ・ その他 なんとなく放浪

#### 伝統知と失われた穀物の復活



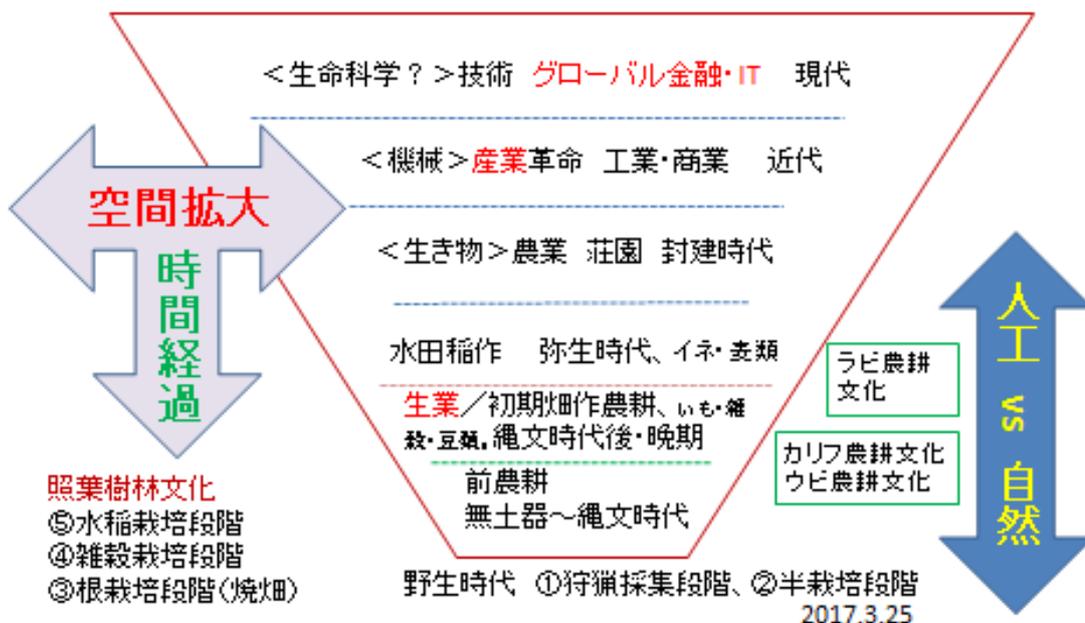
#### どのように辿るのか、 人生の旅路を



### 1. 現代文明の認識

## 現在日本の農耕文化の歴史的多層構造

連続的に、混合的な生物文化多様性への蓄積と衰退  
複雑／単純、虚無・便利の超克 (The nothing / The convenience)



## 2. 学習方法論

### 伝統的智恵の体系と西欧科学的知識の体系の比較

伝統的智恵の体系	西欧科学的知識の体系
自然界のすべての部分が <b>生命あるもの</b> とみなされ、すべての生命は <b>相互依存</b> を形成する	人類の生命は他の生命の形を制御する <b>道徳的な権利</b> をもって <b>上位にある</b> と、一般にみなされる
智恵は主に <b>口承</b> によって伝達される	知識は主に <b>記述言語</b> によって伝達される
智恵は <b>観察と実験</b> によって発達し、習得される	知識は、その応用的脈絡から <b>離れた状況</b> で、一般に学習される
智恵は <b>全体論的、直観的、質的、および実際的</b> である	知識は本質的に <b>還元論主義、量的、分析的、および理論的</b> である
智恵は <b>過時的(長期的)な時間尺度</b> で <b>資源利用者</b> によって生み出される	知識は <b>共時的(短期的)な時間尺度</b> で <b>専門研究者</b> たちによって主に生み出される
特定の智恵の特性と状況は、 <b>精神的な信条のような社会—文化的要因</b> によって影響され、 <b>共通</b> に保持される	特定の知識と状況は、 <b>同僚の論評</b> に影響され、 <b>個別の専門家</b> たちによって保持される
知覚される諸現象の真意の説明はしばしば <b>精神性</b> にもとづき、 <b>主観的</b> である	知覚される諸現象の真意の説明は本質的に <b>合理的</b> で <b>客観的</b> である
智恵は変動する条件下で <b>適切な判断</b> を下すのに用いられる	知識は <b>仮説を提唱</b> し、 <b>基本的な法則</b> 、また <b>定理</b> を確かめるために用いられる

Modified from Johnson (1992)



市民、地域社会が作る

科学者、学会が作る

伝統的智恵の体系

科学的知識の体系

体験

伝達

個人による世界観の構築

学習

表現する、伝える、議論する、共感する、補正するなど

自律的社会行動

持続可能な社会

科学的情報は正確、客観、普遍、再現を求められる

科学的研究方法  
 ・ 観察  
 ・ 調査  
 ・ 測定  
 ・ 実験  
 ・ 面接聴取など

研究結果の処理、加工、  
 考察、文献検索・引用

科学者の  
 作業

公表

学校、個人  
 の作業

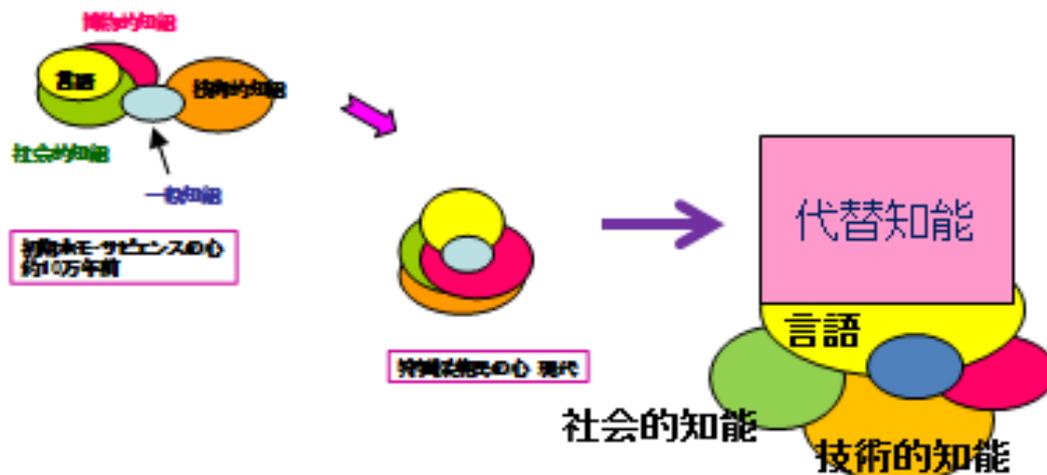
情報データベースの構築

科学的知識・情報の学習・伝達

1. 文化的進化としての環境学習

# 現代人の心

- 心の諸知能は統合の方向に向かってきた。
- しかし、現代人の心はどこに向かおうとしているのだろうか



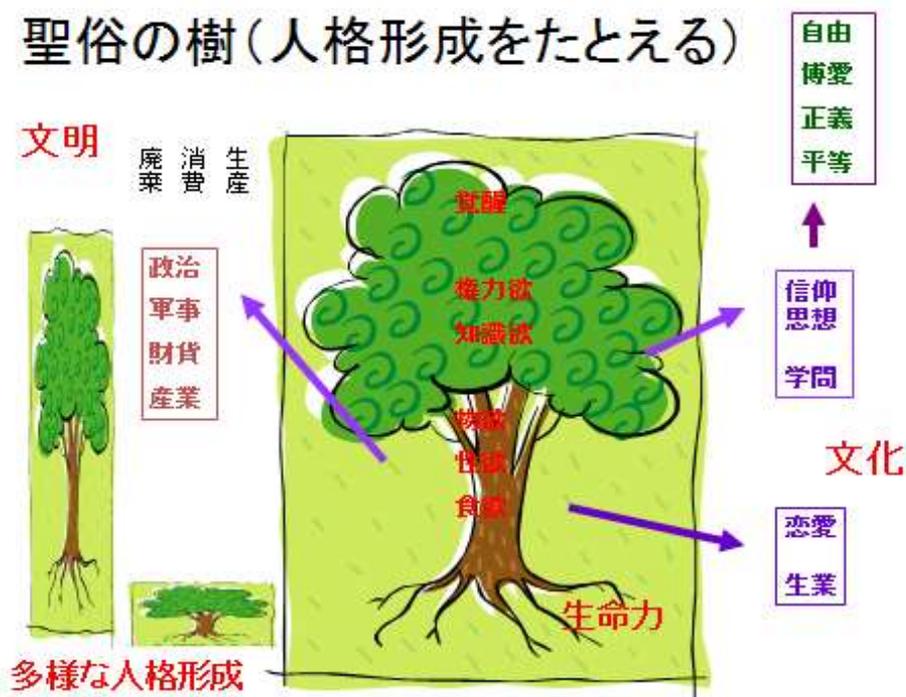
分散縮小と電子頭脳への置き換え?7

2. 学校制度における環境教育

3. 自然と社会環境の課題

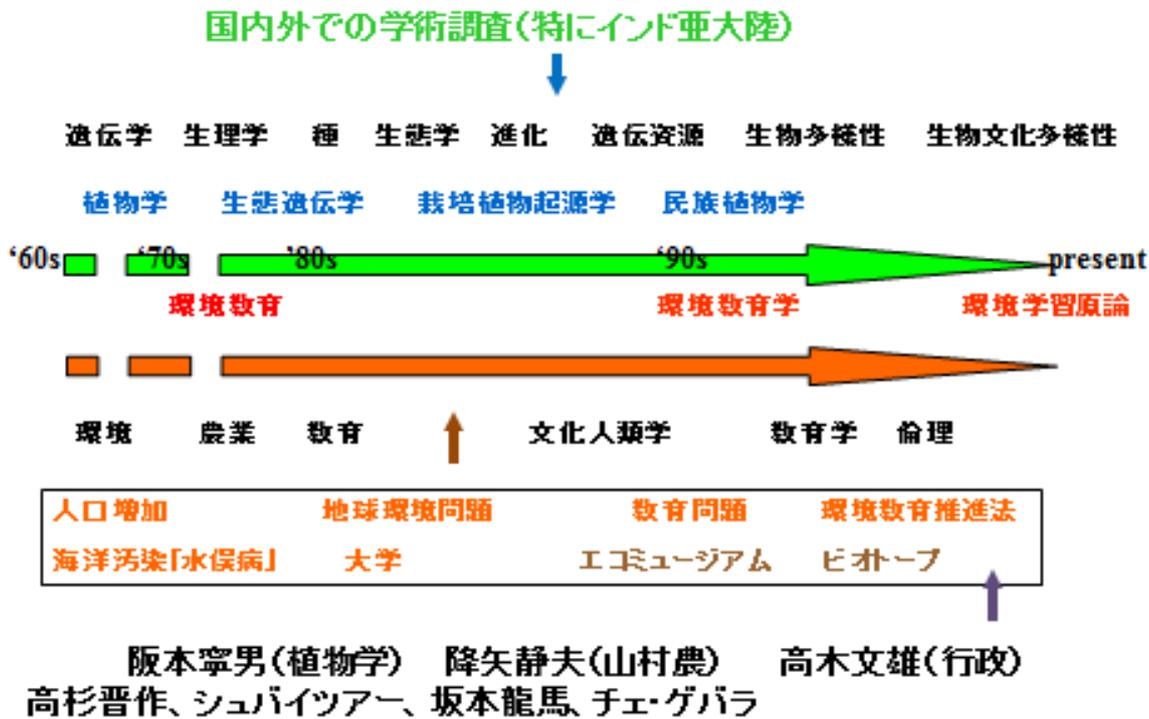
第3章 生涯にわたる環境学習

## 聖俗の樹(人格形成をととえる)



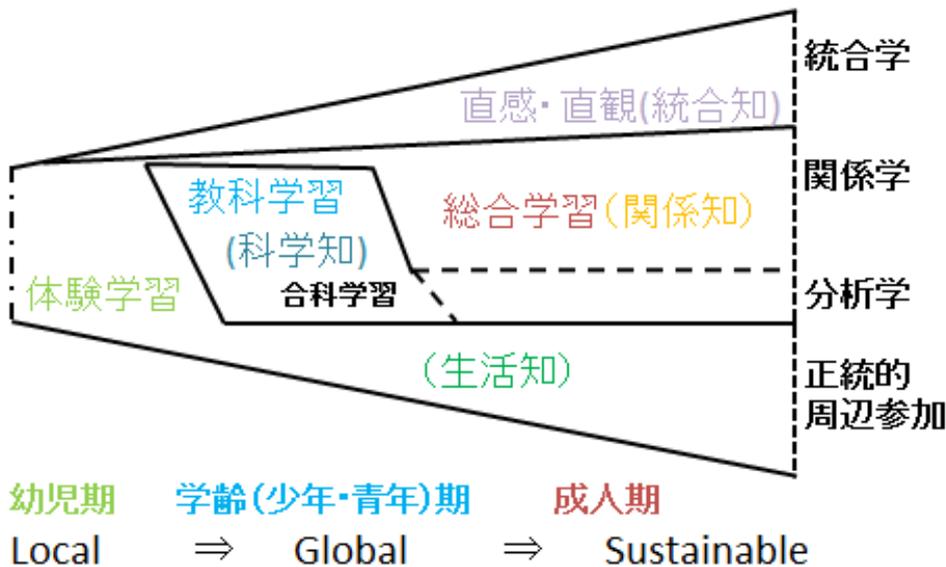
# 1. 生涯にわたる環境学習の意義

## 研究者への個人史



# 2. 生涯にわたる環境学習過程の時間的構造

伝統地域 ⇒ 近代学校制度 ⇒ 現代国際化 ⇒ 未来文明



## 第4章 ELF 環境学習過程とは何か？

1. 環境の広がり学ぶこと (Environment Learning Framework)
2. ELF 環境学習過程の空間的構造 — 枠組み(世界観)としての万華鏡(曼荼羅)
3. ELF 環境学習過程の発達史

年	個人	日本	世界
1948	生まれる 藤原野小生、花壇づくり 松山中生、バス車に花を飾る		
1984		東京都小中学校公恵対策研究会創立	
1987		全国小中学校公恵対策研究会創立	
1988	韓国大学環境学部環境学専攻		
1970	アジア・アフリカ連帯委員会、ラグビー部、児童大学研究会、国立産 伝学研究所研修生		アメリカ合衆国環境教育法
1972	東京教育大学大学環境学専攻科生、水産庁行政委員会	自然環境保護法	人間環境宣言
1974	東京学芸大学大学教育学部環境学教室、学大附属部(自然文化誌 研究会)創立、山十郎室開校		
1975	環境教育研究会の創立準備	全国小中学校環境教育研究会に改称 環境教育研究会創立	ベネグランド憲章 トビリス環境教育政府間台議 世界環境教育戦略
1977			
1980	京大大学農学博士取得		
1988	いんば里大塚など海外調査開始、森と水の会創立		
1988	東京学芸大学公開講座(環境問題)	環境庁環境教育研究会設置	
1987	野村教育実習施設創立		
1988	環境教育学会創立準備会、植樹研究会創立		
1990		日本環境教育学会創立	アメリカ合衆国環境教育法2
1991		大都會環境教育指導資料中高校編 大都會環境教育指導資料小中学校編 環境基本法	
1992			リオ環境と開発に関する国連台議
1993	中央アジア調査		
1994		大都會環境教育指導資料講習台議 大都會GLOBEプログラム開始	
1995	タイでのユネスコ講演、国際シンポジウム		
1996	インド・バンガロール農科大学客員	アジア太平洋環境教育シンポジウム	
1997	タイ、マナーンプラエノ大学客員	大都會ユネスコ日本アジア太平洋環境教育セミナー開始	テサロニク国際台議
1999		食糧・農産・農村基本法 大都會新卒指導環境教育開始 環境教育推進法	ヨハネスブルグ環境開発台議(リオ10)
2002	環境教育法研究会(環境大研21)		「持続可能な開発のための教育」の10年開始
2003			
2005	植樹・保護、有機農業研究会など		
2008	イギリス・セント大学客員 エコミーアム日本村/植物と人々の博物館、現代の植道		
2010	人々と自然の未来研究会(CED市民ネット)		生物多様性条約COP10(愛知県名古屋)
2011	岐阜種子名園植物園に移寓		
2012	ホームガーデン研究会、地域に根ざした(種)環境教育研究会、 伝統研研究会		リオ20 生物多様性の10年
1013			
1014	東京学芸大学定年退職		
-	作家兼任予定		

4. ELF 環境学習過程がめざすこと

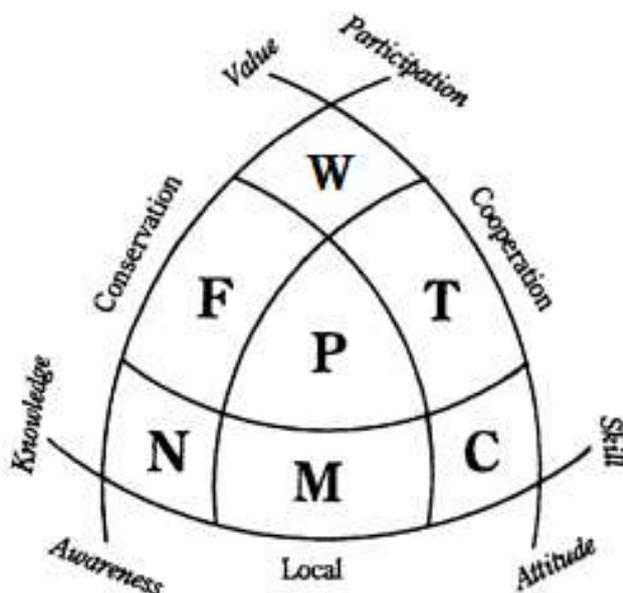
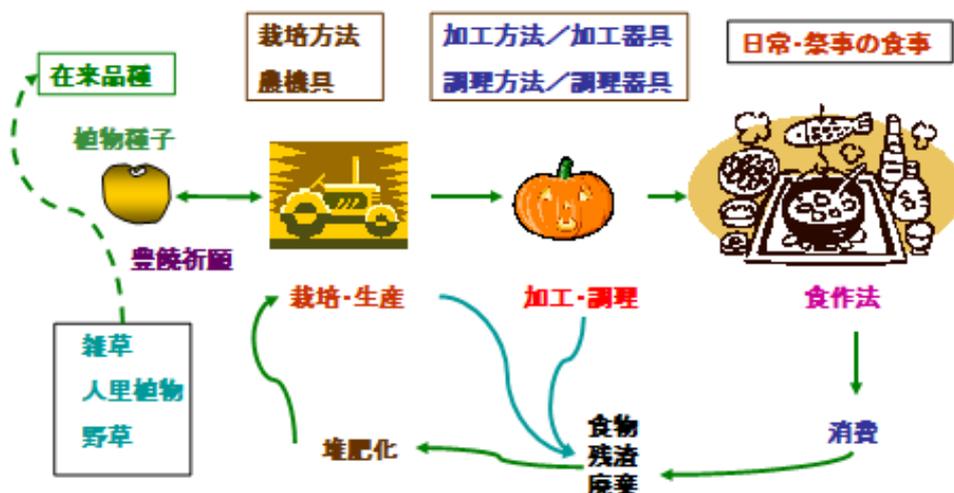


図1 カライダスコウプ方式：環境学習プログラムの枠組み  
 基本学習プログラム：自然誌 N、文化誌 C、世々観 O。  
 連関学習プログラム：生産 M、思索 T、感得 F。  
 統合学習プログラム：遊戯 P。  
 行動プログラム：地域、協働、保全の各学習プログラム。  
 環境教育目標：関心、知識、技能、態度、参加、価値観。

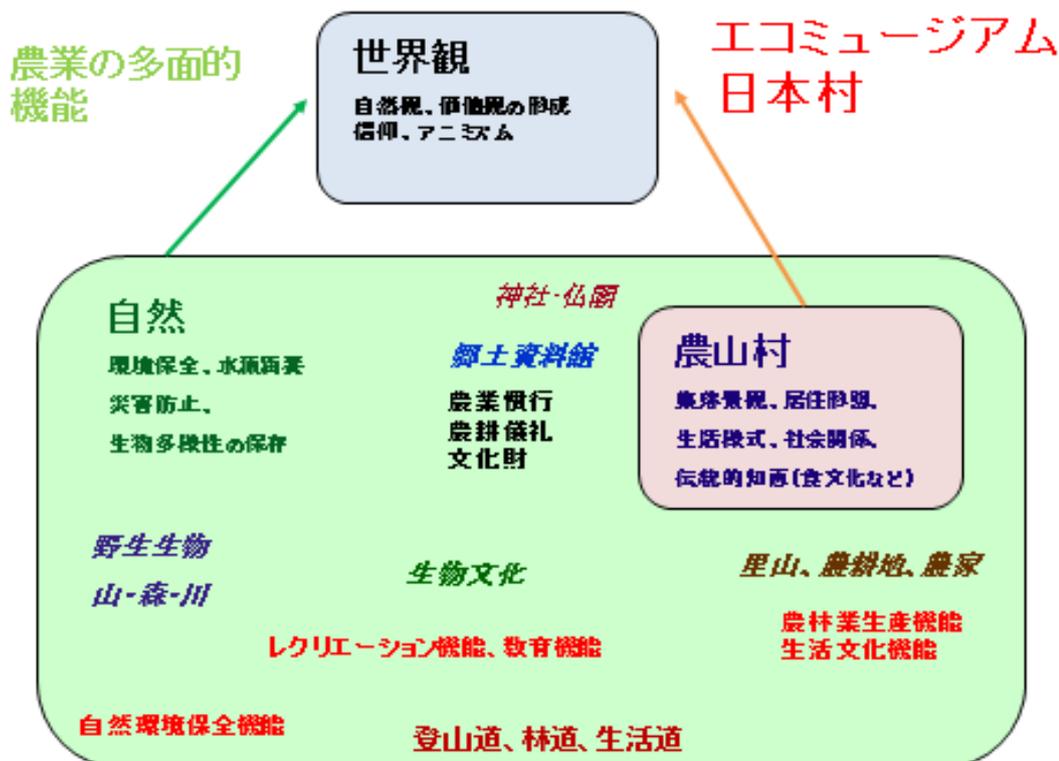
## 第5章 個別プログラムの学習目標と内容

1. 基本学習プログラム：自然誌 N、文化誌 C、世界観 W
2. 関連学習プログラム：生産 M、思索 T、感得 F

### 自然から農耕文化へ 半閉鎖循環系をつくる持続可能な農法を探る



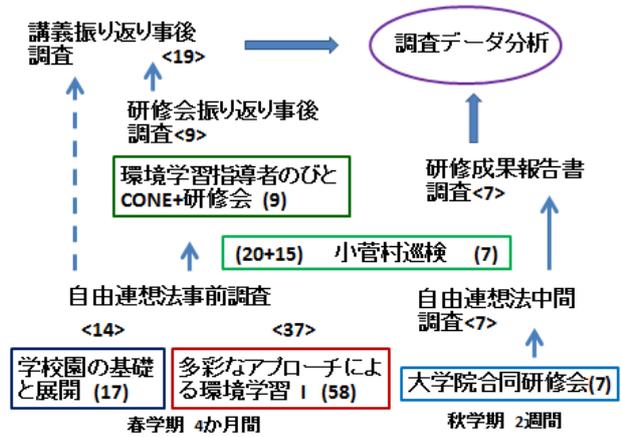
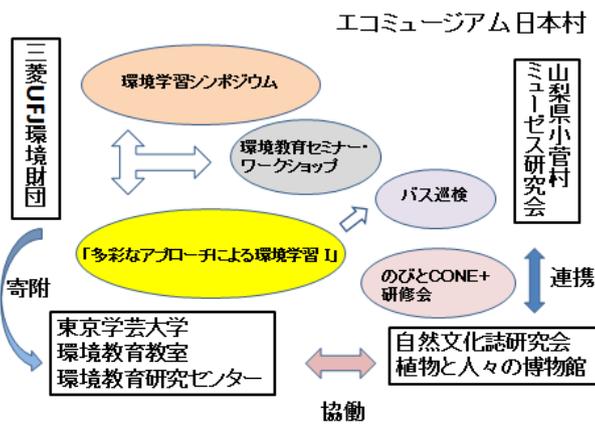
3. 統合学習プログラム：遊戯 P
4. 活動プログラム：地域 L、協働 Cp、保全 Cn



5. 基本、関連、統合、活動の流れと関係性

## 第6章 実践事例とその評価

1. 大学講義科目



## 2. 一般環境学習プログラム

## 3. 子供環境学習プログラム

# 第7章 学校教科「環境科」の提案

表1. 環境科カリキュラム研究会の趣旨

研究会の検討目標

- ① 体験学習の拡大、地域固有の知恵、伝統的知識体系の学習、日本人(感性)を育てる。
- ② 学校では科学的知識体系を学ぶ。受験教育を超えて、今日ある人格(知性)を育てる。
- ③ 知識体系の形成には分析と統合が必要、関係性を知る技能を育てる。
- ④ 学習指導要領の改正: 「生活科」、「総合的な学習の時間」の一部を、「環境科」にする。

環境教育学の位置づけ

- ① 還元論的(科学)と全体論的(環境学)の比較
- ② 分析の学と統合の学の比較検討
- ③ 環境科学(環境化学、環境経済学、環境心理学、環境社会学、環境倫理学)および複合・学際領域(生態学、地理学、文化人類学、生活学)の検討

環境学習の手法

すべての手法を包み込む手法としての環境科

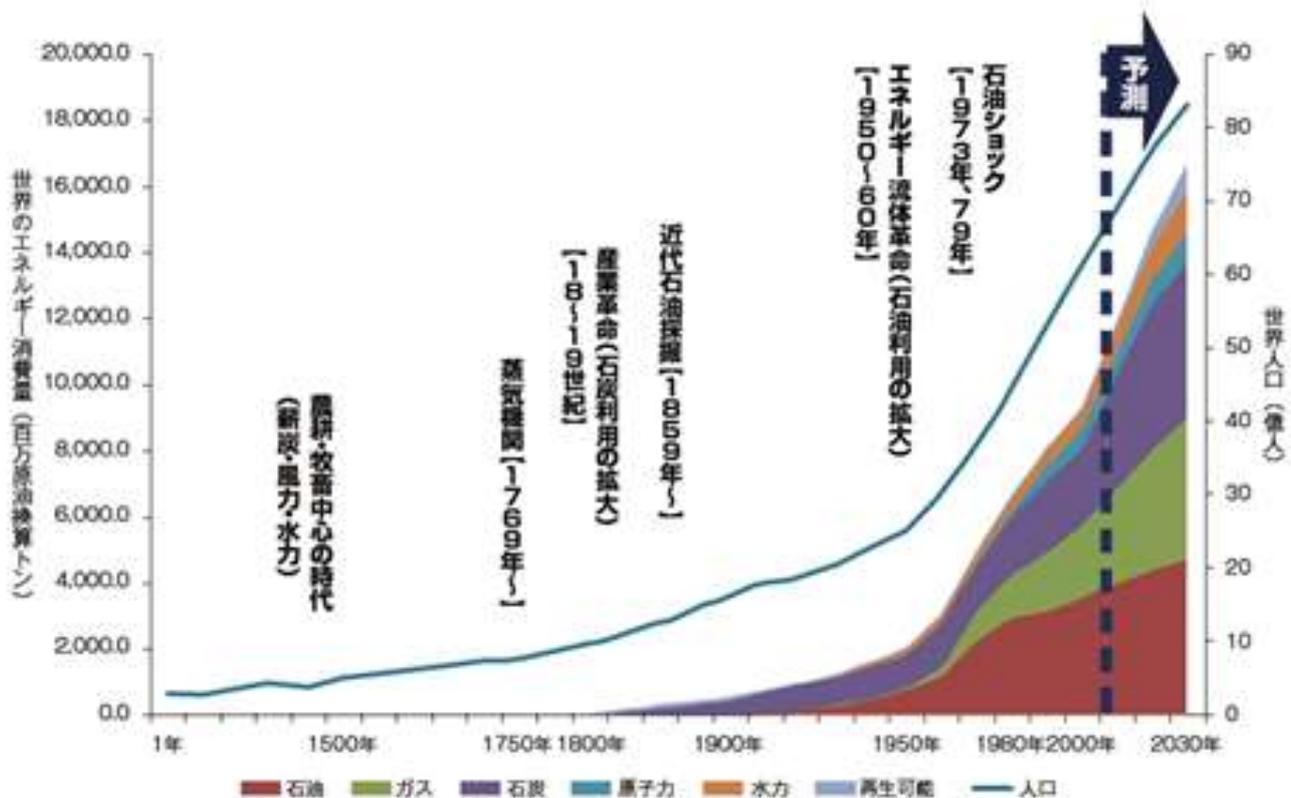
検討する内容

- ① 各教科(学習)で取り上げる「環境学習」  
自然誌、地域社会など教科内容
- ② 合科で取り上げる「環境学習」  
エネルギー、資源、第一次産業、食文化、ごみ問題など
- ③ 総合(学習)で取り上げる「環境学習」  
生産技術、公害、郷土史、自然災害、消費生活、開発、異文化、環境法、経済、伝統文化、体験学習、遠足、修学旅行など
- ④ 統合される「環境学習」⇒ 「環境科」  
世界観(人生、価値、信仰、戦争と平和、倫理など)、科学的知識体系と伝統的知識体系の統合



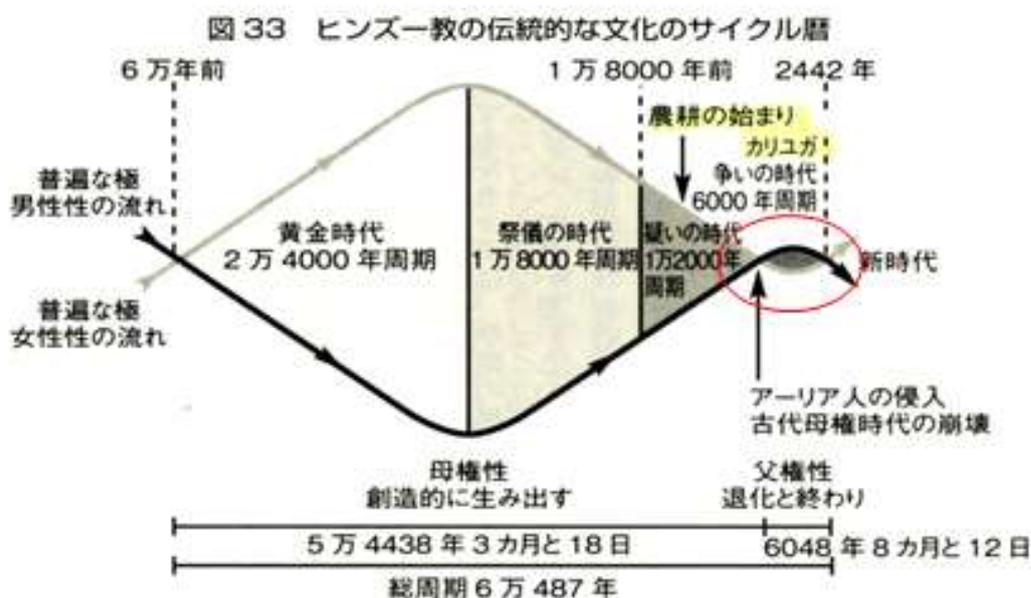
吾唯足知 (京都仁和寺)

## 第8章 ゆっくりと真文明に向かう



(出典) United Nations, "The World at Six Billion" United Nations, "World Population Prospects 2010 Revision" Energy Transitions: History, Requirements, Prospects BP Statistical Review of World Energy June 2012 BP Energy Outlook 2030: January 2013

## 2) 生き物の文明への移行



(出典) R. Lawlor, *Voices of the First Day: Awakening in the Aboriginal Dreamtime Inner Traditions*, 1991. (ロバート・ローラー著、長尾力訳「アボリジニの世界——ドリームタイムと始まりの日の声」青土社、2003年)。

文献

# The principles of Learning Environment

Mikio Kimata

Professor Emeritus of Tokyo Gakugei University; Fellow of Institute of Asia and Africa Language and Culture, Tokyo  
University of Foreign Studies; Doctor of Agricultural Sciences.

Summary

Preface

Chapter 1

Chapter 2

Chapter 3

Chapter 4

Chapter 5

Chapter 6

Chapter 7

Chapter 8

Acknowledgements

Appendix